

博士論文要旨

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌにおける文学創造と幸福 —『ムッシュー・ニコラ』を中心に—

東北大学文学研究科文化科学専攻
石田 雄樹

本論は、十八世紀フランスの作家であるレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの文学創造を、幸福という観点から、考察したものである。レチフの自伝作品『ムッシュー・ニコラ』を主な分析対象とし、文学における幸福観念の様態と、幸福実現の方法論を明らかにすることが、本研究の目的である。

まず本研究の前提条件として了解しなければならないことは、レチフにおける幸福とは何かという問いは、ピエール・テステュによってすでに明らかにされているという点である。テステュは、レチフの目指した幸福は、文学創造によって「生きた本」を実現し、永遠の生を得ることであると指摘している。そこに異論を挟む余地は今のところないように思われる。従って、私たちが本論で考えるべき事柄は、レチフがどのようにして幸福を実現しようとしたかを問うこと、つまりレチフにおける幸福の方法論を問うことである。

第1章は本論に入るための予備的な問題を取り扱う。具体的にはレチフ・ド・ラ・ブルトンヌがどのような作家であるか、また彼の自伝作品である『ムッシュー・ニコラ』はどのような過程を経て成立したものであり、どのような内容や問題点を含んでいるかを詳述する。さらには『ムッシュー・ニコラ』がどのように受容されたか、同時代の作家たちの反応から現代の評価に至るまで、文学史的な観点から、まとめる。

第2章では語りの多層性の問題を取り扱う。自伝作品である『ムッシュー・ニコラ』は、基本的に一人称の語り「私」によって物語られる。しかし、テキスト上ではすべての語り「私」によるものであると思われるが、実際には異なった視点からなされる、性質の異なる複数の「私」が本作では共在していると考えられる。このような「私」の多層性を、物語論や言語学の知見を援用しながら分析し、『ムッシュー・ニコラ』の語りの構造を明らかにすることを目指す。この検討により、本作の語りの多層性が、「生きた本」を実現する上でレチフが採択した、

テキスト上で最も明瞭に観察できる、文学的戦略の一つであることが示される。

第3章では『ムッシュー・ニコラ』の思想史的立ち位置を検討する。第一に、「想像世界 *imaginaire*」の問題を取り扱う。想像世界とは、日本ではまだあまり馴染みのない用語ではあるが、フランスを中心に近年注目されている研究テーマであり、本稿ではこれを「想像力の機能する場」として捉える。その上で、『ムッシュー・ニコラ』の想像世界が「生きた本」の幸福の創造とどのような関係にあるかを、フランスにおける自伝成立に最も大きな影響を与えたイギリス経験論を参照しながら、考察する。第二に、『ムッシュー・ニコラ』の幸福論がどのような思想的系譜に属するかを検討する。西欧哲学においては、伝統的に幸福観念は、幸福主義と快樂主義の二つの側面から検討されてきた。本節では『ムッシュー・ニコラ』に至るレチフの文学キャリアの変遷を踏まえながら、本作が呈示する思想の本質的性格が示される。

第4章は本論のまとめとして、レチフの求める幸福観念の中心を占めると思われる「想起の幸福」がどのようなものであるか考察する。レチフが『ムッシュー・ニコラ』で理想の幸福を実現するために用いた方策は、想像世界における「私」という主体の多層性によってであると考えられるが、そのような幸福は必然的に妄想的な性格を帯びると推測できる。なぜなら、文学創造による幸福は物質的なものではあり得ず、常に精神的なものに過ぎないからである。従って、「生きた本」という望み自体が妄念であるとも考えられる。レチフは、そのような幸福の在り方をどのようにして見出し、実践し、また希望をかけるに足るものと判断したのであろうか。レチフが多大な影響を受けたルソーを比較対象としながら、レチフの幸福探究の実像が本章では明らかにされる。

本稿の結論は、レチフの考える幸福である「生きた本」とは、想像世界における主体の多層性によって達成されるというものである。そのような幸福が基本的に独我論的であり、レチフの自己のエクリチュールが妄想的な性格を帯びている点は特に注目に値する。なぜなら、想像世界で自己の体験を素材とし、理想的な人生を再構築する試みは、本質的に他者を必要としない孤独な試みであるからである。

だが、注意すべきなのは、レチフが読者を不要としたわけでは決してないという点である。「生きた本」を実現するためには、それが本である限り、読み手が必要不可欠なのである。読者によって読まれることにより、レチフは生かされるといえるであろう。

今後の課題としては、語りの多層性の生成過程を歴史的に把握することが第一に求められる。この検討にあたっては、十七世紀以前の回想録や十八世紀における自伝文学の生成史を日記文学なども含めて考察することによって、「私」の多層性の性質をより正確に理解することが必要であるように思われる。

第二に、自己のエクリチュールのもたらす幸福の研究である。レチフが『ムッシュー・ニコラ』で実践した自己を語る幸福、想起の幸福は、単に文学の領域にとどまるものではなく、より広い観点から多様な問題を提起する可能性がある。たとえば、現代は情報技術の発展により、誰もがフェイスブックや twitter に代表される SNS などを通じ、自分語りの幸福を実践している。現代におけるこの種の幸福を検討するためには、西欧だけには限らない包括的な視点が不可欠であることは確かであろう。通時的な、また通文化的な観点から、自己を語る幸福の実像に迫ることが、今後の大きな目標である。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	石田 雄樹
論文審査担当者	(主査) 教授 今井 勉 教授 阿部 宏 教授 大河内 昌 准教授 黒岩 卓
論文名	レチフ・ド・ラ・ブルトンヌにおける文学創造と幸福 —『ムッシュー・ニコラ』を中心に—
<p>本論文は、18世紀フランスの作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの文学創造を18世紀文学の重要テーマのひとつである幸福との関係において考察したものである。自伝作品『ムッシュー・ニコラ』を中心に、レチフにおける幸福観念の様態と幸福実現の方法論を具体的に明らかにすることが本論文の目的となっている。序論で本論の前提となる認識が確認された後、以下四つの章で段階的に本論が展開され、結論へと至る構成になっている。</p> <p>第1章では、作家としてのレチフ・ド・ラ・ブルトンヌの経歴、自伝作品『ムッシュー・ニコラ』の成立過程とそれが孕む問題点が叙述された後、同時代の作家たちの反応から現代の評価に至るまで『ムッシュー・ニコラ』の受容史および研究史が詳述される。第2章では語りの多層性の問題が扱われる。『ムッシュー・ニコラ』は一人称の「私」によって語られるが、実際には、性質の異なる複数の「私」が共存している。物語論や言語学の知見を援用しながら「私」の多層性を分析することにより、語りの多層性が「生きた本」を実現する文学的戦略の一つであることが示される。第3章では『ムッシュー・ニコラ』の思想的地位が検討される。「想像力の機能する場」としての「想像世界 <i>imaginaire</i>」と「生きた本」による幸福創造との関係がイギリス経験論を参照しながら考察された後、レチフの幸福論がどのような思想的系譜に属するかが検討される。西欧哲学における伝統的な幸福観念が幸福主義と快楽主義の二つの側面から検討されてきた点を踏まえ、『ムッシュー・ニコラ』が提示する思想の本質的性格が示される。第4章ではレチフの幸福観念の中心を占める「想起の幸福」が考察される。想像世界における「私」の多層性によって得られる幸福は精神的なものに過ぎない以上、「生きた本」という望み自体が妄念であるが、このような幸福の在り方をレチフはどのように発見し、希望を賭けるに足るものと判断して実践したのかという問題について、レチフが多大な影響を受けたルソーと比較しながら検討が加えられる。「生きた本」の実現が読み手の参画を必要条件としていることを確認し、読者に読まれることによってレチフが生かされているという視点を遠望して本論文は結ばれている。</p> <p>回想録や日記文学なども含めて自伝文学の生成過程を歴史的に把握するスケールの大きな視点に加え、自己を語る幸福の実像に迫る通時的かつ通文化的な包括的視点を獲得する可能性も見通されている点で、本論文が、18世紀フランス文学研究、とりわけレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ研究の進展にもたらした功績はきわめて大きい。よって、本論文の提出者は博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	